

—目 次—

- 1 宣告 002
- 2 訪問と交渉 025
- 3 床入り 035
- 4 既成事実 045
- 5 騎乗位とローション玉と 064
- 6 悪辣な契約 080
- 7 見せつけ 088

「ダーナ・フォン・アルブレヒト。私は貴女との婚約を、今日この場をもって破棄させても
らう」

婚約者である王太子からの一方的な宣告。

それはダーナにとって待ちに待った言葉だった。

(これでクソ姉貴の身代わりをもうやらずに済む！)

人目がなかったらガッツポーズを取りたい気分だった。

あのクソ姉貴ことダーナは、それはもう子どもの頃から我が儘まし放題、父も母も彼女の言い
なりだった。

双子の弟として、何度クソ姉貴の尻ぬぐいをさせられてきたことか。

しかも今年に入ってから、子爵家の次男坊と結婚したいと言って聞かない。

王太子殿下との婚約が決まってもクソ姉貴の発言は変わらず、結果、両親の方が先に折れた。

クソ姉貴にそっくりなぼくを替え玉にして、やり過ごそうというのだ。

(どこの世界に王家を騙して、娘の幸せをとる親がいるんだ！)

そもそも姉がぞっこんな子爵家の次男はプレイボーイと名高い。ちょっと舞踏界で聞き耳を立てていれば、五股、六股、果ては恋人に刺されかけたといった情報が手に入る。

どう考えても、王太子殿下と正式な婚約を結び、玉の輿に乗る方が正解だ。

しかし恋は盲目と言ったもので、十三歳の姉は王太子より子爵家のプレイボーイを取った。

(いつそ七股でもされて、悲惨な愁嘆場しゅうたんばを繰り広げればいいんだ！)

エリックはドレスの袖のなかでぎゅつと拳をにぎりしめた。

何はともあれ、これで目的は達した。

バカ姉貴がどうなるかは知らないが、これでぼくの役目はおしまいだ。

名だたる貴族たちの衆目が集まるなか、ぼくはドレスの裾を広げ、優雅におじきをした。

王太子に捨てられて嘆き悲しむ伯爵令嬢を演じるのは性に合わない。

夜空を思わせる藍色のドレスを揺らし、これ以上ないほど晴れやかな笑みを浮かべてやる。

「かしこまりました。殿下がそう仰るのですたら、私、ダーナ・フォン・アルブレヒトはそ

の婚約破棄を受け取るのみにございます」

今日のために引いた、とびきりのルージュに満面の笑みを乗せる。

変声期前——十三歳の少年の声が高らかに響く。

周囲を取り囲む貴族令嬢たちの忌々しげな目が見えた。殿下に捨てられて泣きもしない伯爵令嬢を、気味悪いとさえ思っているのかもしれない。

貴族たちのどよめきがさざなみとなって大広間に伝播した。

この頭を上げれば、五歳年上の王太子殿下にもうつくり笑顔を浮かべて近づかずに済む。綿をたっぷりつめこんだ胸を押しついたり、女性らしい振る舞いからも解放される。

(もうぼくは自由だ……!)

たっぷりと時間をとってから頭を上げた。

しかし彼は違った。

なにか——。

巨大な責務を押し付けられて、心底苦しげな顔を浮かべていた。

『すまない……』

レオンハルトの声が聞こえた気がした。

それほど彼の表情は暗かった。

(なんだよ。もっと嬉しがれよ。ぼくが偽物のおっぱい押し付けた時、まっかな顔して怒ってきたくせに。女性がそのようなはしたない真似をすべきではない！ と懇切丁寧に説教してくれたお前はどこにいった？ 名門貴族どもに押し付けられた婚約者をやっとなげられる。せいせいした顔をすべきだろう！)

五歳年上の元婚約者の顔は暗い。

少し笑うだけで他人の視線をかつさらえるほどの美貌を持っているクセに。

金髪碧眼の王子様はこれ以上ないほど、苦しげな顔を浮かべていた。

まるでこの婚約破棄は本意ではない、と――。

(なんでだよ……)

レオンハルトと付き合ってから、はじめて困惑した。

一瞬、アルブレヒト家はじまって以来の神童と謳われ続けた脳みそがイかれたのかと思っ
た。

そうじゃない。

彼はぼくの知らない『何か』が原因で、今夜この婚約破棄を言い渡したのだ。

クソ姉貴の行状を知ったから？

——いや違う。

ぼくの正体がバレたから？

——いや変装は完璧だった。

考えろ。考えろ。

もつと違うなにかだ。ぼくたち伯爵家とは違う別の家の思惑が動いている。

今日、この場でぼくを、『ダーナ』を、王太子殿下が切り捨てる理由はなんだ？　そもそも

これは『切り捨て』なのか？

あのなにかに打ち負かされたようなレオンハルトの表情。

(——これは切り捨てじゃない。婚約者を『危険から遠ざける』ための婚約破棄だ……)

「待っ——！」

手をのばそうとした瞬間、即座に憲兵に囲まれた。あっという間に拘束される。レオンハルト

トの目が再び申し訳なきように伏せられた。

従者にうながされるまま、彼は広間から出て行く。

(なんで！　なんでだよ……！)

「こら、殿下の御前であるぞ。分をわきまえろ」

憲兵の叱責と貴族たちの失笑が広間に響きわたる。

そうしてレオンハルトが退出すると、何事もなく楽団が演奏を再開する。

今回の婚約破棄は成功だ。

それは間違いない。

バカ姉貴の代役をみごとつとめあげ、王家を騙したきつたんだ。

なにもかも大成功だ。

なのに、心は晴れない。

口のなかに苦いものが残っていた。

とても後味の悪い果実酒を飲まれたかのように、胸のイガイガが取れない。

(くそっ……)

大理石の床をきつく握りしめた拳で叩くことしかできなかった。

(本当に申し訳ないことをした……)

大広間を抜けたレオンハルトは人知れずため息をついた。

この回廊は王族専用であり、何人も立ち入ることはできない。なんびと

冷たい月の光が降り注いでいた。自分の足元がやけに頼りなく見える。

(ふふ。ダーナより年上だというのに、情けない……)

婚約破棄を言い渡した時の彼女の態度は、それはもう見事なものだった。できるものなら自分もこうありたい。

誰にも媚びず、へこたれず、目は誇りに満ちていた。

自分もあんな人間になりたい。

そう思ったのに、このぎまだ。

(……本当に、私にはもつたいたない女性だった)

そこへ足音が聞こえた。

主は分かっている。

この国で王家の直系となれば、いまや自分と叔父の二人しかない。

「やあ。今宵は良い月だ。甥御よ」

きれいに整えられた口ひげを手でなぞりながら、叔父が近づいてくる。

じゅうしゃ ローブ
豪華な外套をまとった国王気取りの叔父。

「ええ全く。父上が亡くなられた夜もこんな月夜でしたね」

父と母は早くに亡くなった。

噂では毒殺だと聞いている。でなければあれほど健康であった両親が突如、夕食後に急死するなどありえない。

「ふむ。そうだったかな」

自分より首ひとつ背の高い叔父が顔を近づけてきた。悪びれもしない。

これがレオンハルトの敵だった。

この世に生まれてからずっと、この叔父は敵だ。

「ずいぶん古い話をする。それよりも今夜は一年前に婚約した伯爵令嬢をようやく捨てたと聞いたが？」

相変わらず耳が早い。

(いやな男だ……)

数分前の毅然きぜんとした彼女の態度を思い出す。

今だけでもいい。

彼女の気品がほしかった。

「……っ私にはもつたいたない女性でした。彼女と話し合った末に今回の婚約破棄を決めたのです」

にこやかで晴れやかな笑みをたたえる。

決してこの男に悟られてはならない。

今回の婚約破棄が『彼女を守る』ためのものだとは。

「そうか？ そのご婦人は憲兵に拘束を受けたと聞いたが。我が甥もなかなか罪深いことをするようになったではないか」

ぼん、と肩に手を置かれた。

それだけでレオンハルトの全身に虫酸むしずが走った。

「それとも『あのこと』を知られて、お前が彼女に捨てられたのではないか？」

「っ。……なんの、ことでしょう？」

叔父の手が肩から腰へとすべりおちる。尻をなでられた。

「男にしては本当に柔らかくて良い臀部でんぶだ。腹には子どもを宿せる部屋もある……。そんな甥と結婚してくれる女性がいるとは、到底思えなくてな」

叔父のかわいた手のひらが何度も、何度も尻たぶを持ち上げ、なでまわす。

「もうそろそろ諦めるのも手だぞ？ わたしとならば王家の血をより濃くすることができる。

お前の体のこともよく知っているしな」

耳元にそそがれる囁きはまるで毒だった。

「なんならここで抱いてやってもいい。もうお前の手札はないだろう？ レオン」
叔父の手に抱き寄せられ、頬を舌でなめられる。

くちゅ。

唾液が頬をしたたり落ちる。

(なんておぞましい……！)

きゅつと唇をきつく結んで、叔父の遊びに耐えた。

すげなく袖で頬についた唾液をふきとって、睨み付ける。

「結構です……っ……」

乱暴に叔父の手をはねのけて、体を離れた。

足早に自室へ戻ろうとすれば、手を掴まれた。

「もう期限は近いぞ。レオンハルト。お前の婚約者がこのまま決まらねば、王家の血を絶やすことになる。そうなる前にやることは分かっているだろう？ 甥御よ」

叔父が笑う。己の勝利を信じてやまない顔だった。

(ああ憎らしい。殺せるものなら、いっそ殺してやりたい)

だがそれはできない。

今の王国を支えているのは国王代理を務める叔父だ。

王太子である自分にその権限はない。

花冠の儀を迎え、成人となるまでは。

十八歳となれば叔父から権限を継承し国王となれる。

(だがその前にあの問題を片付けなければ、国王になることも、成人を迎えることもできない！)

レオンハルトは叔父の手を引き剥がして、自室に向かう。

叔父の声が後ろからついてきた。

「選ぶ時間はまだある。よく考えることだ。我が愛しい甥御よ！」

その言葉にほぞを噛んだ。

——王は国の父であり母でもある。

それは建国神話として今も語られている一節だ。

事実、ブルーム家には三百年に一度、王室に男性と女性の器を両方もつ子供が生まれてくる。

その子は必ず王国に栄光の時代を築いたと言われる。

幼いレオンハルトにとつてそれは胸踊る予言だった。王族である誇りと自信を根付かせるには十分な内容で、普通の男と少し違う『体』なのも全く気にならなかった。

しかし両親が殺されてから事態は一変した。

頼れる人は遠からず自分から去っていく。乳母も、従者の少年も、護衛の武官もみな王宮に
いることはできなくなり、今では叔父の息がかかった者しかない。

初めは父の弟である叔父を信じようと考えたこともあった。

しかしそんな考えはすぐに打ちのめされた。

『義姉上に本当によく似ている。生き写しのようにそっくりだ』

王家の者しか出入りできない部屋で叔父に唇を奪われた。そうして叔父が母への恋慕をとくどくと語り出した。

その話によると当初、叔父は母を助けようと思っていた。だが母は叔父への想いを一蹴し、父が飲まされた毒をあおつてともに死んだという。

『だからレオンハルト。わたしと契りを結べば、義姉上と一緒にになれる。だから早く子をな

せる体になれ。神話によると十八になればお前の赤ちゃんをつくる部屋は完成するという。

それまで楽しみに待っていてやるからな』

以来、叔父に何度も関係を迫られてきた。必死にかわして逃げては、子どもながらに策を練った。

(なにか、なにか手はないのか?)

このままでは叔父の子を孕まされる。王国の栄光は確実だ。けれど王国に栄光をもたらすと育てられてきた自分の誇りは殺される。

そんなのは嫌だった。

叔父との契りを回避する方法。

それは婚約だ。

叔父の息がかかっている貴族の令嬢と婚約し、彼女を王妃に迎えばいい。

——しかし。

叔父の手の者は予想以上に多かった。何度も裏切られ、陥れられるたび、もう叔父の妻になるしかないかと思った。

そんななか、やっと出会ったのだ。

ダーナ・フォン・アルブレヒト伯爵令嬢と。

奇跡だった。

神の采配はあるのだと信じた瞬間だった。

まあ、彼女と婚約するのは骨の折れる苦行くぎょうだったが、実際に付き合ってみると驚くほど面白かった。

五歳も年上の自分にも怖おじせず、言いたいことはズバズバと言う。

頭の回転は恐ろしいほど早かった。

このまま彼女を王室に迎え入れる。そうすれば叔父に脅おそされることもない。

そう思っていた。

彼女の肖像画を描かせた画家の手が、叔父から小箱につめられて贈られてくるまでは。

それはかつてないほど本格的な脅おそしだった。

彼女が近い将来こうなることは想像にかたくない。

いつだって簡単に人は死ぬのだ。

父と母の死が頭をよぎった瞬間、もう限界だった。

そして今夜、彼女への婚約破棄を申し出た。

完全なる敗北だった。

「……すまない。ダーナ」

ついで彼女に言い出せなかった言葉が、夜の回廊に虚しく響いた。

婚約破棄を言い渡された我が家は、この世の春を謳歌していた。

「どいつもこいつも、くたばれっ！」

ようやくと戻ってきた我が家で吐き捨てるなり、ぼくは部屋にこもった。

ストライキである。

少しは腹を痛めて生んだ息子の怒りを思い知るが良い。

同い年の姉に代わって、なにが楽しくてこの一年女装して過ごさなきやいけないんだ！

窮屈なドレスに、バランスの取りにくいヒール、果ては侍女たちのおもちゃにされた化粧！

「なにがお似合いです、だ！ ぼくは男なんだよ！ 十三歳でようやっと精通もしたれっきとした男なんだよ！ あのクソばか姉貴！ 今すぐ捨てられる！ そんなで、王太子からも子爵からも捨てられた女っていう称号を受け取れ！」

枕を天蓋てんがいつきの寝台に放り投げる。

「うわー。荒れてますねー。坊ちゃん」

ノックもなしに入ってきたのは、執事のベルナルだった。

いつもにやけ面を浮かべていて、本心が読めない。しかし侍女たちにはそこが受けている。

癖の強い赤毛の頭に勢いよく枕を投げつけたが、届かずに床に落ちた。

「まあまあ。無事に王太子殿下から婚約破棄は取り付けたんでしょう？ これで休学していた学院にも戻れるじゃないですか」

慣れた調子でなだめてくるのが、癩に障る。

「姉貴の件がなかったらそもそも休学せずに済んだんだよ！ ぼくは！」

「ああ、その件で進展が」

にこやかな顔で枕をひろい、ベルナールが近づいてきた。

「例の子爵家のプレイボーイですけどね。おもしろい筋から金を借りてるらしくて」

「へえ」

それは朗報だ。

父も母も姉に甘いが、金に関してだけは厳しい。

王国の財政を司る任務に就いているからか、父は金が絡む話にはうるさい。先代が浪費家だったせいだ。こうなれば姉に鉄槌てつづいがくだされるのは間もなくだった。

「今ちよつかいをかけてる女全員に最近金の工面くめんを要求しているらしく、姉君が伯爵さまを頼ってくるのは間違いないですよ」

「ふうん。そうなったら姉貴もとうとう勘当だな」

帰宅してからずっと収まらなかつた腹の虫がほんの少し落ち着いた。ベルナールがにこや

かな笑みを深める。

彼の思惑にはめられた気がしないでもなかったが、それより今は別の問題がある。

「なあ今回の婚約破棄……本当に王太子殿下主導のものだったか？」

「もちろん。伯爵家には殿下から直接断りのお手紙が届いていますし、王宮の知り合いからは殿下が言い出したことだと聞いてますよ」

「ふうん……」

事前に得ていた情報と何ら変わりはない。

なのに、どうにもレオンハルトの表情が気にかかった。

彼が主導して婚約破棄を進めたのなら、どうしてあんなにも暗澹あんたんとした顔を浮かべていたのだろう。

(話がすり合わない……)

「なにか気にかかることでもう？」

ベルナールがしぜんと声をひそめた。

屋敷には三重の結界が張られてあるとは言え、完璧ではない。王太子との婚約が決まって以

来、何人もの『ネズミ』が屋敷に侵入してきた。

すべてベルナルたち侍従の手によって排除されてきた。

だからこそ、ぼくの女装も一年間バレずにやってこれたのだ。

口をひらく。

発音はせず、ベルナルに唇だけを読ませた。

この弱冠二十歳にして伯爵家の執事を務める男は、読唇術に長けている。

『王太子殿下とぼくが出会える機会をつくれ』

読ませた唇の言葉にベルナルが眉をひそめる。意外な申し出だったらしい。

『今回の婚約破棄、殿下の意思ではなく何者かの意向がからんでいる。殿下自身の反応を見
てみたい』

しかしすでにダーナ・フォン・アルブレヒトは王太子の婚約者ではない。会おうと言って会
える人物ではない。

ベルナルの目にはそう書かれていた。

ニツとほほえむ。

『王太子殿下おつきの近衛兵の中でうちに借りのあるヤツがいただろう?』

ベルナールはそこでようやく合点がてんがいったようで、頷いた。

唇を読ませるのをやめると、ベルナールはずっとニコニコしていた。

「いやあ、坊ちゃんにも人の心があったと知って、ほっとしましたよ。なんだかんだで気に入ってらっしゃいましたよね。殿下」

「はあ?　なんだよそれ」

「初デートの日に馬車に乗り込む時、王太子殿下をリードしていたでしょう?　あの時の顔まっかにした殿下の顔が可愛いってずっと仰ってたじゃないですか」

「……言っていない」

「またまた。五歳も年上の殿下に頭をなでもらって嬉しそうにしてたくせに」

「……してないって言ってるだろ!」

からかってくるベルナールを部屋からたたき出した。

静寂が戻る。

(まったくベルナールが変なこと言うから、思い出してきたじゃないか!)

『幼くとも君は立派な騎士だな。私の部下にも見習わせたい』

初めてデートで訪れた離宮の庭園で彼はそんなことを言った。

くすくすと笑う彼の耳元にバラの花弁がくつついて、どんな女よりもきれいに見えた。

五歳年上ならもっと男性的な体つきをしていいはずなのに、浮き世離れしているせいかわ彼の妙に細い腰つきにどぎまぎさせられた。

初めての女装、初めてのデートに気を張り詰めて、夕暮れ時には彼のひざを枕にして眠ってしまった。いた。

そんな自分をとがめることもなく彼は膝を貸してくれて、か細い子守歌を歌ってくれた。

子ども扱いされるのが大嫌いだったのに、彼にだけは許してしまった。いた。

そんな彼が婚約破棄の場であんな暗い顔をしていたのだ。

少しは手を貸してみたっていいだろう。

失って困るものは何もない。それに……、

「別れる時くらい、もっとイイ顔しろってんだ……」
初デートの時に見せた彼の微笑が脳裏に強く浮かんだ。

「っ。どうしてあなたがここに？」

レオンハルトは予想外の来客に困惑した。

もっと話がしたいと思っていたが、もうそれは叶わないと思っていた。

当の本人がいま、目の前に客として椅子に腰かけている。

ダーナ・フォン・アルブレヒトその人は、レオンハルトの当惑も素知らぬ顔で優雅にティーカップを傾けている。

あの夜とはちがい、今日の彼女は栗色のまっすぐな髪に純朴な白い花飾りをつけて、愛らしい緋色のドレスをまとうていた。

舞踏会で身につけていた藍色のドレスは肩を出していて、少し大人びて見えたが、今は十三歳の少女相応に見えた。

「お座りになつてはどうです？ 王太子殿下」

晴れやかな笑みを浮かべたダーナに着席を勧められる。

「ああ、そうだな……」

今日は近衛隊長がむかし世話になった人物が、自分との茶会を求めていると聞いていた。

(まさか彼女だったとは——)

近衛隊長も事前に言ってくれば良いものを、とかたわらに立つ青年をにらむ。

クスクスと笑う声が聞こえた。

「近衛隊長どのを責めないでやってください。私が無理を聞いて頂いたのです。きっと——私だと知ったら殿下はお会いになつてくださらないでしょう?」

ぐうの音も出なかった。

「すまない」

「ふふっ。あのような事があつた後では、私に会うのも気まずいでしょう。だからです」
年齢に比して大人びた物言いが懐かしい。

彼女とデートしたのがずいぶん前のように思えてきてしまう。

レオンハルトは勧められるまま、椅子に腰かけた。

近衛隊長に部屋から下がるよう命じる。

このティーサロンは自分の寝室とつながっている。プライベートな空間の近くに他人を招くということ、すなわち心を開いているという証だった。

そうやって今までの王族も親しくなる相手を選び、獲得してきたのだ。

(私は苦手だが……)

他人をえり好みしているようでもうどうにも好かない。

そのため相手の地位にかかわらず、近しい相手と話す時は必ずこのティーサロンを使ってきた。

ダーナが訪れるのも初めてではない。

「君はあいかわらずイタズラ好きだな」

苦笑して、すでに用意されていたティーカップを口に運ぶ。

(少し苦いな……)

渋みを感じたのは彼女への負い目からか。

レオンハルトには分らない。

「それで今日来たのは、どういった用向きかな？」

白いカーテンから西日がこぼれ、彼女の栗毛を赤く照らす。

緋色のドレスが深みを増した。

(怒っているのだろうか……)

自分の身勝手な考えから婚約破棄したのだ。

こんな男にかける言葉など決まっている。

苦しげに眉根を寄せて、彼女が怒りを発するのをじっと待つ。

だがいくら待てども、彼女がなじる声は聞こえてこなかった。

「——はあ。またその顔。婚約破棄を宣言した夜も、そんな顔をしてらっしゃいましたね。

まるでそう——ぜんぶ自分が悪いと思ひ込んでるお顔」

ダーナの声にぎくりとした。

テーブルの下で握っていた手のひらが汗をかく。

(なぜ……どうして?)

顔をあげると、彼女は悠然とした表情で頬杖をついている。

「私も馬鹿じゃありません。今回の婚約破棄が何者かの意向がはたらいっている。その程度のことでは察しがつきます」

「——そんなことはない！ あれは私の意思で……っ」

彼女を守るために行ったことだ。

それだけは決して悟られてはならない。

知られれば彼女の身に危険が及ぶ。

叔父の毒牙にかかった彼女の姿を見たくはない。

「殿下ご自身がお決めになられたことなら、どうしてもあの夜あんなにも暗いお顔で婚約破棄を宣言されたのです？」

「それは……」

「曲がりなりにも殿下と一年はつきあった身。あれが殿下ご自身の意思で行ったようには到底見えませんか？」

彼女は追撃の手をゆるめない。

「私がそうだと決めたのだ。まだ幼い君には分からないだろうが！」

むんずと襟首をつかまれた。

少女の力とは思えない強さに驚く。

「その年下扱いされるの、ぼく、死ぬほど嫌いなんですよね」

「え……？ あ……、ぼく……？」

はじめて聞く言葉だった。

伯爵令嬢として育て上げられた彼女はいつだって『私』と言っていた。

ドレスの裾^{すそ}さばきは堂の入ったもので、申し分ない淑女^{レディ}だった。

その彼女がいま『ぼく』と言った。

予想外の言葉に混乱する。

「はあ。ばかばかしい。クソ姉貴のせいで、この一年間、殿下とおつきあいさせられて、ぼくだって色々と頭^{かぶ}にきてるんですよ。まあ、あの婚約破棄はそもそも渡りに船ではあったんですけどね」

ぞんざいな口調で足を組む。

そこに伯爵令嬢^{レディ}だったダーナは、もういなかった。

西日に染まった栗色の髪、美しい緋色のドレス、小柄な体たいく軀からはまるで高熱の炎が発せられていくかのようだった。

琥珀色の瞳は冷たい光を放ち、美しい眉は不機嫌そうにひそめられている。

(まるで別人だ……)

可憐な唇から激しい言葉がつむがれる。

「クソ姉貴がほかの男とくつつきたいから身代わりにさせられて、王太子殿下から捨てられる。別にぼくにはどうでもいいんですよ。これでクソ姉貴が王家を騙した罪で破滅したって。ただ、殿下のその顔は気に入らない。好きでもない女を振るんなら、もう少し増しな顔で振ってくださいよ」

愛らしいピンクのルージュが引かれた唇からつばが飛ぶ。

「大体、嘘ついてるのが見え見えなんです。あんな顔で婚約破棄されたら、さも誰かの思惑で婚約解消したと言ったも同然でしょ」

「——ちが……」

「否定しても無駄です。どうせそいつとの戦いにぼくを巻き込まないために婚約破棄したん

でしょ？ 違うって言うなら証明してくださいよ。今ここで」

理路整然と語られるダーナの言葉に何も言い返せない。

そもそも王家の秘密に関わることなのだ。

叔父との仲違いが知られたら、それだけ彼女に被害が及ぶ可能性がある。

レオンハルトはぐつと口をつぐんだ。

ふん、とダーナが鼻を鳴らす音が聞こえた。

「どうせ建国神話にからんだ話なんでしょ？ 先の王弟殿下が色物好きなのは有名な話ですから」

「なっ——！！ どうしてそれを!?!」

顔を上げると、ダーナがニヤリと笑った。

そこでカマを掛けられたと気づく。

「へえ、やっぱりそうなんだ。ぼくも半信半疑だったんですけど、殿下のその反応を見る

と、本当なんですな。あの話」

心臓がどくん、と大きく鳴った。

(——どこまで知って……)

「男色好きで有名な王弟どのが殿下を見るあの目。どうしたって獲物を狙っているように見
るのが自然でしょう？ しかもあの王弟どのが娼館から買い上げてる男娼が殿下によく似た
金髪碧眼とくれば、まあ予想はつきますよ」

ダーナの言葉に顔がこわばる。

(今すぐ逃げなければ……)

これ以上彼女の話聞いてはいけない。

そう思うのに足は凍り付いたように動かなかった。

「あの分だと、さしもの王弟どのもまだ殿下には手を出していませんね。意外だなあ。
それとも王弟どのは好物を最後に取っておくタイプなのかな？ ねえ、どうなんです。殿下」

「——き、君には関係ない！」

襟首をつかむ手をほどこうとした瞬間、ダーナが魅力的な言葉を口にした。

それはあまりにも抗いがたい誘惑だった。

「王弟どのが嫌いなんですしょう？ 一つだけありますよ。王弟どのに一泡ふかせられる方法」

ダーナの言葉に硬直する。

このまま彼女の手を離すべきか、迷う。

(もしも……もしも本当にそんな方法があるというのなら——)

あの嫌らしい目で見つめられることも、皺しわびた手に体をまさぐられることも無くなるというのなら、賭けたい。

二人きりのティーサロンに長い沈黙が落ちた。

時間にして数秒、いや数分だったかもしれない。

だがレオンハルトにとってそれは自分の人生を変える決断だった。

唇の震えを必死におさえながら尋ねる。

「その方法とは一体なんだ……？」

ダーナが悪魔のような笑みを浮かべる。

「ぼくと既成事実を作りましょう」

「え……？」

部屋に入ってきた時と同じく、困惑がレオンハルトの体に入った。

「ふーん。寢室に続いてる部屋っていうのはこういう時便利ですよね♡」

ダーナに手を引かれるまま、自分の寢室に連れ込まれる。

夕暮れ迫る寢室は窓から差し込む朱色の光に染め上げられて、淫靡いんぴに見えた。

天井も、天蓋付きのベッドも、白い窓枠や足元の絨毯じゅうたんも。

そこから中じゅうから妖しい空気があふれていた。

こんな経験は一度もない。

「ちょっと、待ってくれ。ダーナ、その、私は君とこういうことをするつもりは——！」
力ならこちらの方が強い。体格も勝っている。

なのに、ダーナの手には逆らえなかった。

たった十三歳の少女に手を引かれるまま、ベッドに座らされる。

ほん、と両肩に手を置かれたらもう逃げ場はなかった。

「ぼくも殿下と寝ることになるとは思ってもみなかったんですけどね。こうなったら毒をくらわば皿までです」

ほっそりとした幼い指がレオンハルトの唇をなぞる。

(年下なのに……！)

いけないと思いつつも、彼女に体重をかけられて背筋がゾクリとする。

今まで女性を抱いたことは一度もない。

女性の扱いは幼い頃から仕込まれたが、こうした場でのリードは特殊な体を持っているせいで一切行われてこなかった。

だから誰かとねや閨をとともにする、というのはレオンハルトにとって初体験だった。

年上らしく振る舞おうと思っても、どんな行動がそう見えるのか分からない。

必死にダーナを止めるしか術がなかった。

「その、君はまだ……成人もしていない。そんなみぎりに、私と寝るなど君にとって醜聞にしかない。そうではないか？」

「ああ、それなら別に構いませんよ。ぼくは何も困りませんから」

ぐっと両肩を押されて、ベッドに押し倒される。ダーナが乗り上げてくる。

十三歳の少女の重みを感じて、心臓がうるさくなった。

栗色の髪に挿された花飾りは白い小花をあしらったもので、大層美しい。

あどけない顔に引かれたルージュや目元を彩る色粉は少女から女性へと変化する様子をまぎまぎと告げてくる。

緋色のドレスが夕暮れ迫る寝室で揺らめき、腹のあたりに彼女が乗っかる。

(な、なん……だ……っ……!?)

鼓動がずつと高鳴っている。

ぷちん、と彼女が私のシャツのボタンを一つずつ外していく。

白い肌があらわになった。男にしては体毛も少ないことが昔からコンプレックスだった。それを十三歳の少女の手であばかれて、無性に恥ずかしい。

「そ、その……ダーナ、頼むからこんなことは……っ……」
ふにゆ。

少女のかぼそい指が自分の乳首に置かれた。

指の腹で何度も乳首を押し倒されてはつままれ、こねられる。

「——やめっ！」

声を上げた瞬間、ダーナの顔が胸に近づいてきた。

でろり、と生温かいものに乳首がしゃぶられる。それが彼女の舌だと気づいた時には、もう乳首は彼女の唾液で濡れそぼっていた。

ぬらぬらと光る乳首が夕陽に照らし出されて、淫蕩いんとうに見えた。

ぎゅつと目をつむり、忘れ去ろうとするが鮮烈な光景は消えない。

むしろ忘れようと思えば思うほど、脳に深く刻み込まれる。

「ふふっ。殿下の乳首かわいい。ピンク色で女みたいにツンツン立ってる。しかも下から持ち上げられるくらい、雄っぱいあるし。実は女の子だったりします？ 殿下」

「ちが……う。たのむから……こんな、こと……やめなさ、……い……！」

ダーナの顔を胸から遠ざけようとしたが、少女はどかない。

「これだけあるならばくのも挟めるんじゃないですか？」

「へ……？」

少女がドレスの裾を持ち上げ、股間から何かを取り出す。それは自分のモノよりも立派な性器だった。

太くて竿は長く、血管が浮いている。どくどくと脈打ちながらそそり立っていた。笠はキノコのように開いていて、独特の形をしていた。

それが十三歳の少女のドレスの間から出現した。

(な……んで……?)

「あは。びっくりしてる。そういう顔の殿下もかわいいなあ。ほら。ぼくの。殿下の雄っぱいでしごかせて下さいね」

どきりと胸の間に少女の肉棒が置かれた。

レオンハルトの混乱をよそにダーナはそのまま肉棒を胸にすべらせてきた。にゆるにゆると胸元をぬめる感触に、背筋がぞわりとする。

(だめ……だ。こんなこと、……やめさせないと……っ)

顔にまで迫る肉棒におびえながら、ダーナの体を押し返そうとする。

「やめ……やめなさい！ 君は仮にも淑女だろう。どうやっているのか知らないが……こんなこと、すべきではない」

するとダーナの顔が冷めたものに変わった。

「へえ……淑女。ぼくが淑女、ね。本当にそう思ってるんです？」

「なにを……。君はアルブレヒト家の伯爵令嬢ダーナだろう？」

少女が舌打ちした。

もう彼女は自分のなかにある悪意を隠そうともしなかった。

「その呼び方、大嫌いなんですよ。ぼくはエリック。エリック・フォン・アルブレヒト。ダ

ーナは双子の姉。ぼくの名前じゃない」

眉をしかめ、見下ろしてくる表情は冷たい。

「ふたご……？ あね……？」

アルブレヒト家には確かに双子が生まれていたと聞いていたが、社交界でお披露目されたことはまだない。

少女は十歳から、少年は十四歳からお披露目するのがこの国のルールだ。

だからレオンハルトが知らないのは当然と言えた。

「本当にぼくが『男』だって気づいてなかったんだ。へえ、ふうん」

エリックは心底氣にくわれないという表情で、再び肉棒をすべらせることを再開した。
にゆる、ぷぷっ！

独特の音を立てて肉棒が眼前に迫る。大きな亀頭から透明な液体が漏れていて、胸元や鎖骨、首もとまで濡らす。

「——っ！ 気づかなかったのは、すまなかった……！ だが、こんなこと……する必要は………ひっ……」

濡れた亀頭が胸の谷間から離れ、今度は乳首に押しつけてくる。
少年の唾液と体液がまぎりあい、さらに卑猥な光景に変化した。

「あるんですよ。どうせ、あの王弟どのにケツ狙われてるんですよ？ なら、殿下の初めてはぼくが奪ったことにすれば、あの初物好きのおっさんも殿下のこと、少しは諦めるでしょう」

「なっ……ケツ？ はつもの……？」

初めて聞く単語と目の前の光景のせいでうまく頭が働かない。

「建国神話が本当なら、殿下の体には赤ちゃんをつくる部屋があるんですよね？」

エリックが腰を浮かして、へそのあたりをさすってくる。

その瞬間、今まで叔父から大切に守っていた操がエリックにこれから奪われるとやつと理解した。

(既成事実をつくるとは……まさか、そういう……?!?)

にやりと少女の恰好をした少年が楽しそうに嗤う。

「殿下が孕むまでやりましょうね♡」

エリックの宣言と同時に逃げようとしたが、再び腹に乗っかられて動けない。身をよじるこ
としかできなかつた。

「はあ。ずりずり動いてくれて、殿下のおっぱい、きもちいー。とりあえずそのきれいな
顔にぶっかけていいですよね♡」

「やあ……だめ……え……ッ……!!」

悲鳴は少年を悦ばせるだけだった。

ぐぢゅん！ と少年の竿が硬くなり、下乳に乗せられた睾丸がふくらむ。顔面に迫る亀頭から出てくる先走りが一気に増えた。

「やめなさ——！！」

「はあ、イクよ。たくさん出すからね。殿下の白いほっぺたも、金色の髪にも、おでこにも、唇にも全部塗りたくってあげる……っ……っ……！！」

どたぶん！

と重量感のある音が響いた瞬間、顔じゅうに生温かい液体をかけられた。

それはすぐ終わることなく出続け、宣言どおりレオンハルトの唇や目元、髪にもぶちまけられた。

びゆるびゆると白い液体をひっかけられ、鎖骨や胸元、乳首まで汚される。清潔なシートは今や少年の出した精液で無残に濡れていた。

何よりもレオンハルトにとって衝撃だったのは、エリックに精液をかけられて、自分の体の奥が濡れていることだった。

決して誰にも知られてはならない場所が、じんわりと熱くなっている。

まるで少年の肉棒を迎え入れる準備が着々と進めているかのようだった。

(「こんな……私は……ちがう……っ！)

かたくなに否定しても起きたことはもはや覆せない。

「じゃあ、既成事実づくりの続き、しよつか？ 王太子殿下♡」

無邪気な声はまだ終わりではないと続けていた。

「ちょっと待て……っ。エリック、やめなさい——！ んんっ……」

自分のうわずった声が寢室に響きわたった。

五歳も年下の少年にベロチューされ、シャツを脱がされた状態はとても王太子殿下と呼べるものではなかった。

「ふふっ。殿下、キス慣れしてないんだ。かわいい♡」

これではどちらが年上か分かったものじゃない。

「付き合ってた相手が実は女じゃなくて、男だったなんて知らなかったんですもんね。でも自分の叔父とこうやって舌を絡ませたり、乳首つねられるより増しでしょう？」

それは事実だった。

長年、自分の体をなめまわすような視線を送ってきた男に抱かれるよりは増した。

だがそれが五歳年下の少年だとは思わなかった。

「ほうらチャックさげてご開帳しましょうね」

ジジーツと音を立てながらズボンを脱がされる。

「へえ。殿下の下着、白いんだ。もしかして清楚な感じ、狙ってるんですか？」

「っ!! 狙ってない!」

足を揃えて少しでも少年に見られる部分を消そうとしたが、膝まで下ろされたズボンが邪魔でうまくできない。

「ちゃんと下着はふくらんでるから、おちんちんはあるんですね」

今まで誰にも自分の下半身のことをからかわれた経験が無かったから、ただただ恥ずかしさだけが募る。

顔が熱くなり少年の顔をまともに見られなくなった。

「——言うなっ……!」

そう一言、抗弁するだけでやっとなった。

少年の細い手が腰にかかり、ゆっくりと下着をズリ下ろしていく。

「だめ……っ……! やめなさ……い……!」

脱がされまいと下着を引つ張るが、少年の言葉に負けた。

「いいんですか？ このままぼくと既成事実をつくれなかったら殿下は自分の叔父さんに抱かれて、たくさん中出しされちゃうんですよ？」

それは絶対に嫌だった。

（あの男とだけは——！）

エリックの指が下着に手をかけられたまま止まる。こちらの反応を待っているのだ。

獲物を狩る猛獣のように。

（とんだけだもの獣だ……！）

身なりは小さくとも彼は十分に獰猛な肉食獣だった。

泣きはらした目を伏せて、ゆっくりと掴んでいた下着から手を離す。

選択肢などない。あの叔父と少年のどちらかを選べと言われれば、彼を選ぶしかない。

「ふふ。いい子。いい子」

五歳も年下の少年に頭をなでられて、恥ずかしさと嬉しさとがこみ上げてくる。

もう泣けばいいのか笑えばいいのか分からない。

「じゃあ王太子殿下のあそこ、見せてもらいますね」

するすると肌に食い込んでいた下着を脱がされ、下半身が無防備になる。

「ほら、足ひらいて。ぼくに見せて」

少年の言葉におそろおそろ両足を広げた。

いまだかつて誰にも見せたことがない場所が、今自分の婚約者だった少年の目にさらされる。

（——こんな、恥ずかしい……!）

羞恥心で死にたくなつた。

「だいじようぶ。今からもっと恥ずかしいこととしてあげますからね♡」

少年の言葉に、もう何も信じられなくなる。

「……やつ……むり、だ……! しんでしまう……っ」

「だいじようぶですつてば。死ぬより気持ちイイことするんですから。ね?」

頬を包まれて、つむじにキスを落とされる。

五歳年下の少年に優しくあやされて、今まで王太子として生きてきた自尊心が突き崩され

ていく。

(だめだ……だめだ……！　こんな、こと——！)

必死に自分の心に抗おうとするが、うまくいかない。

「それではお披露目ですね。殿下の」

無慈悲な言葉と同時に少年の体が両足の間に割って入り、太ももを大きく広げさせられる。手で秘所を隠そうとしたが、遅かった。

「わあ。おちんちんのすぐ下、ほんとに女の子の性器になってる。このまあるい粒つぶ、何かなあ？」

子どもらしい口調で、少年の手が睾丸の下にある女性器にふれる。

真珠のような丸い粒を指の腹で転がされた。

くにゅ、くにゅくにゅ、くにゅにゅ。

「やああああ——ツッ！　指で押す、な……あ、あ、あ……っ♡」

「かわいい声になってきた。もっと指でいじってあげますね。このツブツブの近くにあるひだひだをめくってあげるとイイのかな？」

つう、ともう片方の手で柔らかい肉ひだをめぐりあげられた瞬間、悶絶した。

「——っ、ツ、っ！ ひい——うんん……ッ」

「甘くてかわいい声。もっと聞かせて。殿下のメス声」

メスなどという呼び方でなじられ、背筋がゾクゾクした。

腰がわななないで、勝手に体が揺れるのが好きなんだ。少年の指でもっとさわってほしいみたいに。

「へえ。こういう風に言われるのが好きなんだ。じゃあ、ほじられたらどんな声上げてくれるかなあ」

(ほじる……?)

どこを? と思った瞬間、少年の指が体内に入ってきた。

つぶつぶの下にある小さなわれめの中に少年の人さし指が強引に割り込んでくる。

「うわ。きつつー。本当に処女なんだ。殿下」

「あ、あ、あ、だめ……ナカ、かきませる、な……あ……」

「かき混ぜられる方が好きなんです。自分から感じるやり方を教えてくれるなんて、殿下は優しいなあ」

「ちが——！」

ぐぶぐぶぐぶ！！

突如、少年の指が増やされた。まだ誰にも許したことの無い秘所が少年の指によって押し広げられていく。柔らかい少年の指腹で浅い入り口の肉芽を押され、なでられる。

ゆっくりとした動きにつられるように体液があふれて、少年の指を濡らす。

ちゅぶ、ちゅぶちゅぶ。

空気を孕んだ音に変わり、全身に羞恥と言う名の甘い痺れが走る。

「とりあえず一回メスイキ覚えちゃいませうね。殿下♡」

「やつ、あつ、あつ……なにを言って……ひんツ♡」

すると指の動く速度が一気に変わった。

二本入っていた指が三本に増やされる。体内でばらばらにうごかされ、浅いところを何度も指の腹でなでられ、こすられ、いじられた。

下半身からわずかに電流が走る。

(いやだ……これ以上されたら……もとに……戻れなく……なる！)